武蔵野日曜集会

一粒の麦
――ヨハネ伝第12章12～36節――

１９８４年10月21日（武蔵野）
小池辰雄

受難週　栄光を受くべき時　無的実存　「されど」　十字架と聖霊　光のある間に　一粒の麦

【ヨハネ12・12～36】

12 明くる日、祭に来りし多くの民ども、イエスのエルサレムに来り給うを
きき、13 棕梠の枝をとりて出で迎え、『「ホサナ、讃むべきかな、主の御名に
よりて来る者」イスラエルの王』と呼わる。14 イエスは小驢馬を得て之に乗
り給う。これは録して、15 シオンの娘よ、懼るな。視よ、なんじの王は驢馬
の子に乗りて来り給う』と有るが如し。16 弟子たちは最初これらの事を悟ら
ざりしが、イエスの栄光を受け給いし後に、これらの事のイエスに就きて録
されたると、人々が斯く為ししとを思い出せり。17 ラザロを墓より呼び起し、
死人の中より甦えらせ給いし時に、イエスと偕に居りし群衆、証をなせり。
18 群衆のイエスを迎えたるは、斯る徴を行い給いしことを聞きたるに因りて
なり。19 パリサイ人ら互に言う『見るべし、汝らの謀ることの益なきを。視よ、
世は彼に従えり』20 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人あ
りしが、21 ガリラヤなるベツサイダのピリポに来り、請いて言う『君よ、わ
れらイエスに謁えんことを願う』22 ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレ
とピリポと共に往きてイエスに告ぐ。23 イエス答えて言い給う『人の子の栄
光を受くべき時きたれり。24 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ち
て死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。25 己が
生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ち
て永遠の生命に至るべし。26 人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る
処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父こ
れを貴び給わん。27 今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より
我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。28 父よ、御名の栄光をあ
らわし給え』爰に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さ
らに顕さん』29 傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』と言い、ある
人々は『御使かれに語れるなり』と言う。30 イエス答えて言い給う『この声

の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。31 今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。32 我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』33 かく言いて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。34 群衆こたう『われら律法によりて、キリストは永遠に存え給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか、その人の子とは誰なるか』35 イエス言い給う『なお暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、暗き中を歩む者は往方を知らず。36 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給えり。

●受難週

12章からは、いよいよ受難週間のところです。

12 明くる日、祭に来りし多くの民ども、イエスのエルサレムに来り給うをきき、13 棕梠の枝をとりて出で迎え、『「ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者」イスラエルの王』と呼わる。

これはヨハネ伝1章にも出てます。入城のところは、マタイ伝でいうと21章です。棕櫚の枝を持って迎えるということは、王様や将軍が戦争から帰ってきて凱旋するときに勝利の象徴として持つ。これは詩篇118篇25節を見ましょうか。詩篇118篇は結婚式のときによく歌う。

「25 エホバよねがわくはわれらを今すくいたまえ、エホバよねがわくは我等をいま栄えしめたまえ。26 エホバの名によりて来るものは福なり。われらエホバの家よりなんじらを祝せり。27 エホバは神なり、われらに光をあたえたまえり。」（詩篇118・25～27）

こういうところを歌いながら迎えるわけです。「ホサナ」というのは、「ホシュアナー」というので、「救いたまえ」というヘブライ語です。「イエホシュアー」「ヨシュア」というのと同じ字です。「ヤーヴェーは救いなり」というのが「ヨシュア」という字の意味です。

14 イエスは小驢馬を得て之に乗り給う。

驢馬は平和と柔和の象徴です。羊もそうだ。このことはもう旧約に預言してある。

これは録して、15 シオンの女よ、懼るな。視よ、なんじの王は驢馬の子に乗りて来り給う』と有るが如し。

こういう不思議な言葉がゼカリヤ書にある。ゼカリヤ書は8章までと、9章以下との二つの部分からなっていて、9章以下は「第二ゼカリヤ」とも、ある人は言いますけれども――即ち、第二ゼカリヤの第1章になるわけですが――9章9節に、

「9 シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ、視よ汝の王汝に来る。彼は正義しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に

乗るなり。

そういう不思議な言葉がある。

10我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶ん。

「車」というのは戦車、「馬」というのは「軍馬」です。

戦争弓も絶るべし。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし。」（ゼカリヤ9・9～10）

「海より海」というのはアラブの海から地中海の方です。「河」というと大体、チグリス・ユーフラテスの河です。そのときの全世界に及ぶというわけです。9章9節というのは不思議な言葉だね。

「シオンの女よ、エルサレムの女よ」

というのは、「市民よ」ということを「女よ」という言い方でいう。そういう平和を、喜びをもたらせる王者であるという。

●栄光を受くべき時

16弟子たちは最初これらの事を悟らざりしが、イエスの栄光を受け給いし後に、これらの事のイエスに就きて録されたると、人々が斯く為ししとを思い出せり。

「キリストのこの姿がはじめは分からなかったけれども、あとから分かった」

という。旧約をよく読んでおけば分かるはずなんだ。どうも、キリストの弟子たちもそのへんはダメです。キリストが十字架にかかって、弟子たちは散ってなおさらダメになって、復活してやっと目が覚めて、聖霊が来てやっとすべてのことが分かったというわけですからね。

17ラザロを墓より呼び起し、死人の中より甦えらせ給いし時に、イエスと偕に居りし群衆、証をなせり。

これがラザロを復活させたことをみんなに言いふらした。

18群衆のイエスを迎えたるは、斯る徴を行い給いしことを聞きたるに因りてなり。

みんなやっぱり徴がなければどうにもならないわけだ。キリスト自身がまことに徴のもとですから。キリストという徴はなかなか見えない。これは聖霊がこなければ、我々クリスチャンだって見えない。私は自分の体験からはっきり言えます。

19パリサイ人ら互に言う『見るべし、汝らの謀ることの益なきを。視よ、世は彼に従えり』

「もうかなわない。だから、あれをやっつけなくてはいかん」

と。そういう捨て鉢な言葉です。

20礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人ありしが、
これはおもしろいですね。ギリシア人がいたという。もちろん、福音を受けたギリシア人です。福音と言ったって、まだ本当の意味の福音ではないけれども。
21ガリラヤなるベツサイダのピリポに来り、請いて言う『君よ、われらイエスに謁(まみ)えんことを願う』
「だいぶいろんなことを噂で聞いているけれども実際にお会いしたいんだ」
と言って、ピリポに――ピリポは聖霊の器ですから――言って来た。
22ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。
「ギリシア人が先生にお会いしたいと、こう言ってます」
と。だんだん異邦に福音が伝わっていく先ぶれみたいなものです、このギリシア人は。
23イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。
いよいよ、十字架・復活・昇天という時、それが「栄光を受くべき時」です。キリストはもう先の先まで見えておられるからね。
24誠にまことに汝らに告ぐ、
「誠にまことに」と言うときは、非常に内容の大事なときです。
一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、
そのまま置いておいたら、枯れてひからびてしまって、どうにもならない。地に落ちることが大事なんだ。「死ぬ」というのは殻が破れることです。
もし死なば、多くの果を結ぶべし。
麦の粒の殻が割れて、根が出て芽が出る。だから、キリストは十字架の死を死んで、根を張って芽を出すのは、復活の生命だ。そうすると、そのうちに穂がどんどん伸びていって、何百という数に増えていくわけでしょ。一粒が何百倍かしてしまうわけだ。

●無的実存

25己が生命(いのち)を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠(とこしえ)の生命に至るべし。
24、25節は非常に大事な節です。聖書でも最も大事なものの一つです。
「一粒の麦」という詩を、讃美歌をそのうちに作ります。さっき、ここを読みながら、パッとそう思った。すぐできます。
「己が生命を愛する、その生命を憎む」
の「生命」という字は「プシヘー」という字が使ってある。あとの方の「永遠の生命に至る」の方は「ゾーエー」になっている。
「永遠の生命の中へ（エイス　ゾーエーン　アイオーニオン）進んでいく」

という。「生命」という字が別に使ってある。日本語でも本当はここのところを別な字にするとおもしろいんだけれども。「プシヘー」という字は「魂」というように使うこともある――「己が魂を」というときに「己が生命を」と――ヘブライ語でいうと「ネフェシュ」という字になるけれども、ヘブライ語でも同じような使い方をします。

「プシヘーを愛する者は、これを失い、プシヘーを憎む者は永遠のゾーエー・アイオーニオンに至る」

と。「の中へ」という意味の「エイス」を使ってある。

「血気の体あり、霊の体あり」

とパウロが言った。

「その血気の体を惜しんでいたらダメだ。死ぬべきときには死ぬんだ。そうすると、永遠の生命が来るんだ」

と。いや実に、プシヘーの奥にもうゾーエーの核が、生命の核が形成されつつあるわけです。キリストの復活はまさにそれが現象したわけです。

けれども、生命を、我々の肉体を粗末にしてはいかんですよ、やっぱり。肉体がある限りは、神さまの御用に立つために――肉体をただ肉体のゆえに愛するようなことをしたらダメなんで――御名の故にこれをちゃんと大事にして使っていくということとは、これは矛盾はしませんから、そこは間違えないように。

「それでは身体のことはもういい加減にして、大いに酒でも飲んでしまおう」

なんて、それはダメだ。

そういうわけで、

「プシヘーを惜しんでいたらいかん」

と。しかし、この無的実存というのは、もう対象的に省みないんですよ。対象的に惜しいとか惜しくないとか、そんなところではない。自分のプシヘーを無にしているわけでしょ。自分のプシヘーを無にしていると、無量な世界が来ているんでしょ。即無量、これがゾーエーなんです。だから、「己の生命を憎む」というのは、私の言葉で言わせると要するに、

「プシヘーを無にしてしまうと、ゾーエーが来て、ここに動いている。プシヘーの中に聖霊が来ていますから、プシヘー即ゾーエーという不思議なことになってしまう」

ということ。だから、

「愛するの愛さないの、憎むの憎まないの」

なんていう相対的な言葉もいらなくなってしまう。キリストのこの御言をいい加減にしているんじゃないですよ。この御言の真義はそういう意味においてとらえるということです。

●「されど」

26 **人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。**

「仕える」ということは、従うということだ。「従う」ということは、同じく「居る」ということだと。この「居る」も、「共に居る」ということと「中に居る」ということとの両方が「居る」です。ヨハネ伝のあとに出てくるところの、「我に連なれ」ということで、「エン・クリスト」の世界です。

実はその「中に居る」という境地に入らないと、「従う」ことが本当の意味においてなかなかできないんです、外側から従うのでは。「中に居る」という境地が今度は、「共に居る」「従う」ということになる。この関係はみんな離すことができない。

そういうことは、どうしてもこの聖霊の世界に入らないと、そういうところが自由に弾力性をもって把握できない。何段構えにもなってしまう。何段構えにもなると、かえって苦しい。「共に居る」ことはまた「中に居る」ことであり、「中に居る」ことは「共に居る」ことであり、「共に居る」ことはいくらでも「従う」ことであり、「従う」ことはまた「仕える」ことである。これはみな連関している。

だからいつも、真理の中心は、焦点は一つなんです。私は「焦点」という言葉が好きだ。焦げる点、そこで火を発するようなところだから。火を発する、あるいは泉となって迸る。どっちでもいい。聖霊は水と火と、どっちにも譬えられる。

「活ける水が泉となって流れる」

という。

そして今度は、キリストは何を仰ったかというと、

人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給わん。

キリストはいつも父と一つだから。父の栄光があがるという。

27 **今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。**

「何を為すべきか」とか、「何を言うべきか」とか、よく出てくる。

父よ、この時より我を救い給え、

もう十字架が迫ってきたから、心騒ぐ。人間としてのキリストが出てくるわけです。

されど我この為にこの時に到れり。

「されど」と言って、いつもひっくり返してしまう。

「わが意にあらず」

と。本当は、十字架になんかかかりたくない。いきなり天界へ行きたい。しかし、「けれども」と言って、贖罪のために十字架にかかる。この「されど」もそういう自己否定です。

「だけれども、私はこのためにこの時に来た。これをはずしたら、父に従うことにもならなければ、今までのことがすべて無駄になる。どんなに奇蹟を行っても。」

と。「画竜点睛」のその「点睛」のところだ。「点睛」はキリストにおいては十字架なんだ。竜を描いて最後にその目玉を入れる。人の顔でも何でも、絵描きは目が一番大事なんです。目を書きそこなったら、おしまいだから。目は口よりものを言うという。本当にそうです。口ではいい加減なことを言えるけれども。

●十字架と聖霊

28 **父よ、御名の栄光をあらわし給え』**

キリストは、我々の弱きをちゃんと同じく持ってらっしゃる。だから、凄いんです。これがいわゆる英雄豪傑だったらしょうがない。弱きを持っていながら、実は英雄豪傑よりも強いものが来ている。これが聖霊なんです、キリストには。この聖霊というものは大変なものです。

爰に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さらに顕さん』

今までにさんざん、キリストはその御言、御業をもって栄光をあらわした。

「更に最後の栄光をあらわす」

ということで、天から声が来た。こういう現実は、いい加減な気持で普通の人は読んでいるけれども、本当は読めていない。こういうところは本当に深く冥想しながら、祈りながら、同じくその声を聞くような境地に入って読まないとね。

29 **傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』と言い、**

普通の人たちには、雷の声みたいに聞こえた。これは異言だ。

ある人々は『御使かれに語れるなり』と言う。

異言的な言葉だから、「御使かれに語れるなり」と言う。

30 **イエス答えて言い給う『この声の来りしは、我が為にあらず、汝らの為なり。**

「私はもう分かっている。お前たちに分からせるために、この声が来たんだ」と。

31 **今この世の審判は来れり、今この世の君は逐い出さるべし。**

いよいよ、審判がやって来たと。十字架は審判ですよ。

「十字架に私をつけることは、いかに罪が深刻なものかということの審判なんだ。その審判を自分は独りで受けてしまう」

と、こういうわけです。キリストに十字架によって審かれていることを知らないで、

「キリストは十字架にかかった」

なんて思っていると、とんでもない話だ。我々が審かれているのを、キリストはその審判を全部受けとっているだけの話だ。それが贖罪という。審判をキリストが受けとってしまった。キリストが審かれているのではない。間違えては困る。その我々の審判を受けとったキリストの十字架をなみしていると、「羔の怒」というのが来る。これが最後の審判になるわけです。

こないだ『エン・クリスト』に「恕と怒」という字を書いたでしょ。キリストは十字架で我々を赦している。「恕（じょ）」は赦す。赦すのは、審判を受けとって赦しているんですよ。ただ大慈大悲ではない。もう、我々は無罪にされた。過去も現在も未来も――相対的な人間小池はダメだけれども――全部これは無罪にされている。全然、問題ない。それでは、

「問題ないお前はどうするか」

というと、

「問題ないから、お前は聖霊を受けとれ」

と。問題ないところの場に、無の場に、無罪の場に、聖霊がやって来る。無罪の場は、これはキリストがつくっている絶対恩寵の場なんだから。悟りの無ではないですよ。仏教でいうと、大慈大悲の世界なんです。大慈大悲が、福音では審判をちゃんと通っている。だから、

「信ずる者は審かれない」

とキリストはちゃんとはっきり言っている。「信ずる」というのは、

「私の十字架を本当に受けとれば」

ということですよ。「キリストが神の子である」ことを信じたって、どうにもならない。本当に十字架を冥想してごらんなさい。神の義が審いているんだ。「怒（いかり）」というのは別の言葉でいうともちろん、「義」です。神さまの義が審いている。そうすると、この義を実存したキリストの生きた義が――活ける義と言ってもいい。観念の義ではない。実質のある義が――入ってくる。これが聖霊の世界です。実質のある義を無条件に与えるのが、これが「愛」ということ。義と愛とは離すことができない。神さまの御意を百％に行うことが義だから。そこには生命がある。神の愛がある。光がある。

●光のある間に

私はなぜ、「天」という字が好きかというと、これは光輪だから。人の頭の上に光輪がかかっている。これが「天」という字だ。これは恩寵の光輪です。御霊の光輪だ。漢字の成り立ちがこうなっているのを知って、私はうれしかったね、天という字はそういう字ですかと。

なぜ、こういう福音を受けとらないのかね、一般の無教会というのは。また、普通のキリスト教会は。もう私は来年からは組織神学会を脱退しようかな。まぁ、キリスト教学会だけには入っていてもいいよ。組織ではないから。まぁ、ドイツ文学会とキリスト教学会には、聞きたいのがあったら、聞きに行くだけのはなしだ。もう、ボヤボヤしてられないものな。あなたがたはまだ若いからいいが。

若いからというけれども、あなたがた、若い時が大事だよ。無駄にしないことです。大いに、

「生涯をかけて私はこのことをやるぞ」

と、使命感に生きなくては、人生はつまらない。どなたでも、必ず使命がある。人の目に

どう見えようが、それに打ち込んでいくことです。
ベートーベンも自殺しそうになった。自殺しようと思って、遺言状を書いた。けれども、
「自分はこのムジーク（音楽）のために」
と言って、やめた。そして、人を本当に慰め励ます作曲が始まった。年末になると、ベートーベンの第九シンフォニーをお聞きになるけれども、シラーの言葉やベートーベンの魂に本当に応えているかと。聞く者も歌う者も、福音からそっぽではしょうがないんだ、ただうまいくらいでは。多少うまくなくても、魂がかかっている方がいい。

32 **我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん**『

これは楽しい言葉だね。
「私は天界に行ったら、みんな私の所に引き寄せるぞ」
と。キリストは牽引力があるんだ。キリストの本願の力は引き寄せる。

33 **かく言いて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給えり。**

十字架における贖罪と、それから復活、その生命。

34 **群衆こたう『われら律法によりて、キリストは永遠に存え給うと聞きたるに、汝いかなれば人の子は挙げらるべしと言うか、その人の子とは誰なるか』**

またそういう質問している。
「キリストは永遠に存え給うということは聞いている」
と。おもしろいね、これは。本当にながらえている。けれども、地上でいつまでもいるわけではない。永遠の生命というものはそんなものではないぞと。地上はしばしの所だけれども、そのしばしの中にもう既に永遠は宿っています。だから、本当の意味でもって、永遠の生命の内容が分かってないものだから、こんなことを言っている。
「挙げられたらおしまいではないか」
なんて。

35 **イエス言い給う『なお暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、暗き中を歩む者は往方を知らず。**

「光のある間」というのは、キリストは光だからね。
「私がいるうちにしっかり歩め。いなくなったら、しょうがないぞ」
と。キリストは光なんだけれども、彼らはこの光において歩くことができないんです、キリストはこう言っておられるけれども。できるのなら、この弟子たちはもっと素晴らしい歩き方ができるんだけれども。これは仕方がない。キリストはそこのところを論理を越えて仰っているのでね、
「本当はダメなんだよ」
ということなんだ、もうひとつ奥の方は。
「本当の光がお前たちの中に入ってくるまでは、本当はお前たちはダメなんだ。私

の光をただ外側から受けたってダメなんだ」

と。そこまで説明してないけれども、そういうことなんですよ、本当は。

36 **光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ**』

これは無理なんだ、「光のある間に」というが。いや、光たるキリストは、「ある間」どころではない、これから地の果てまでも世の末までも光としてあるんですよ。あるけれども、

「今、私という光がとにかくあるのに、お前たちは本当に私の中に投げ身してないじゃないか」

と、まぁ言うわけだね。だけれども、それは誰もできない。この言葉は本当は無理なんだ。誰も受けとれないんです、本当のところは。ある程度は受けとっても、本質的には受けとれない。これはパウロが言っているとおり、御霊が来るまではとてもわからんということ。あとでヨハネ伝に出てくる。キリストも、

「私の去るのは、お前たちにとっては益だ。去らなければ、お前たちには真理は来ないんだ」

と。それとここのところは本当は内容的には矛盾しているけれども、まぁ一応仰っているわけです。

●一粒の麦

それで、24節にもういっぺん戻ります。「一粒の麦」ということ。我々は一人びとりが本当に一粒の麦にならなかったら、クリスチャンではないわけです。「死なずば」と言いますが、なるほど、私たちはそのうちに死にますけれども、そういう死も「死なずば」です。こないだ、

「百行一死に如かず」

と書いた。百の行為も一つの死にはかなわないと。キリストは地上で驚くべきことをなさいました。けれども、キリストの死は、キリストの地上における奇蹟や何かと比べることのできない力を持っている。この十字架の死は、百行一死に如かず。

キリストに限らず、我々もそうです。私の兄貴は死んだことによって私を活かした。そして、私を通してまた皆さんに福音が伝わっている。その意味において、私は一粒の麦になっているわけです――兄貴は一粒の麦だけれども――私はまだ死なないけれども、地上の我というものにもはや問題なく死んでいる。そうすると、聖霊の我になっているときには、もう、この一粒の麦は霊的には死んで、霊的に生きているでしょ。そうすると、福音が伝わる。

皆さんも、地上にありながら、既に一粒の麦は地に落ちて根を張り芽を吹き出している在り方をしてなくてはいかん、ということを言いたい。

「我々の日常の生活には根が張っているぞ、芽が吹き出している。そして、幾人かの人たちに福音は伝わっているぞ」

と。それが証（あかし）なんです。地上にあって既に一粒の麦は地に落ちて死んで、そして根を張り

芽を吹き出して、たくさんの果を実らせつつある。それが証人（あかしびと）ということです。こういう話は今日初めてする。

内村鑑三は地上でそのようなことをした。また内村鑑三の死はそれだけのものです。手島郁朗の死もそうである。我々は、しかし、大事なのは――大事なのはと言ってはおかしいけれども、どっちも大事ですけれども――既に生きている現在において我々がそのような生き方をして、人に福音を伝えていく。自分が破れていかなくては。そういう意味において、この「破れ」の存在というのはまた別の意味を持っている。

破れの実存です。あの1章（『無者キリスト』第二部　人間の福音的実存第七相の第一相）で書いたあの「破れ」とは違うですよ、今私が言っている「破れ」は。「破れ幕屋」というのは今度は別な意味を、積極的な意味を持ってくる。破れながら、人に分かち与えていく破れでなくてはいかんね、この破れは。八方破れというのはそれだ。八方破れで行かなくては。八方破れの実存だ。

キリストの中に自分たちはキリストを隠れ蓑としている。キリストを隠れ蓑として、キリストの中に入る。これが「エン・クリスト」だ。キリストの中に隠れると、本当の意味において自分が破れていく。そして、相手に光を与え、生命を与え、本当の知恵を与える。これはもう、一対一の伝道がいいですよ。何も集会をしたってしなくたって、それはどうだっていい。もうあらゆる場所が伝道の場所であり、あらゆる形態が伝道の形態になるんです。

こないだ、私は宴会の席の壇上から、見も知らないような人たちにしゃべって、そして異言になってしまったから困った。福音が破れて出てくるんです。それが一粒の麦の本当の在り方ということです。

どうぞ、遠慮なく福音の証者になってくださいよ。もう時は迫っていますからね。遠慮なんかしている時ではない。真理は必ず勝ちますから。今日、集会に来なかった人に内容を伝えてくださいよ。もう一回一回が、破れながら進んでいるんですから。終ります。